

別紙1 (博士論文の審査結果の要旨)

専攻名 システム創成科学専攻

氏名 町島 希美絵

本論文は、認知症高齢者に対して、メンタルの充実による“QOL(生活の質)の向上”と“BPSD(行動・心理症状)の緩和”を目的としている。この実現には、高齢者のアクティビティ(日常生活行動、人間関係、趣味・娯楽活動、その他の全般の活動)に関わるスタッフ(介護スタッフなど)に、メンタルとアクティビティのケアに必要なスキルの習得が不可欠である。本論文では、スタッフに対してメンタルとアクティビティのケアに必要なスキルを向上させる情報システムの構築に向けた研究に取り組んだ。この分野は、近年の高齢社会において人手不足の著しい介護業界を支援する研究として注目されており、今後も更なる研究展開が求められている分野である。

本論文は全7章で構成されている。

第1章では、本研究の課題と目的、さらに章構成の概要を説明した。

第2章では、一般高齢者のメンタルとアクティビティのケアに必要なスキルを習得し、地域コミュニティで実践しているスタッフのスキルを分析した。その結果、メンタルとアクティビティのケアに必要なスキルには、(A)参加者の主観的情報にとどまらず、認知機能などの客観的情報を取得して総合的に把握するアセスメント・スキルと(B)高齢者の参加/活動の意欲を刺激するように関わるコミュニケーション・スキルが重要であることが明らかとなった。

第3章では、教育背景や熟達度の異なるスタッフに対して、一般高齢者へのアセスメント・スキルを習得するための教育支援アプリケーションを開発した。また、このアプリケーションの有効性を、一般高齢者群と若者群の作業遂行を評価した結果を比較することで検証した。その結果、年齢差を反映させ

た作業遂行評価が可能であることが明らかとなった。

第4章では、教育背景、熟達度の異なるスタッフに対して、一般高齢者へのコミュニケーション・スキルを習得させるための教育支援アプリケーションを開発し、その有効性を検証した。その結果、高齢者との会話を録音して再生する機能のみでは、スキル向上には不足であることを示した。また、自己評価と他者評価を組み合わせ、学習者が自己の成長や変化を確認し、主体的に学習するシステムの構築が必要であることがわかった。

第5章では、BPSDの緩和を目的とした認知症高齢者のアクティビティを個人化するアプローチ・システムについて述べた。スタッフの認知プロセスを分析したところ、アクティビティの個人化に必須のスキルは、認知症者の身体的な情報と作業能力を把握するアセスメント・スキルであった。スタッフからは、アセスメントの結果をもとに“振り返りミーティング”で議論することで、認知症高齢者が満足感や達成感を得られる、個人化したアクティビティが組めることがわかった。

第6章では、高いコミュニケーション・スキルとアセスメント・スキルを有するスタッフで構成されるデイケア施設で、個々のスキルをチーム・ケアに発展させて、継続的に運用するシステムについて述べた。アクティビティの個人化プロセスは3つ(準備・実施・振り返り)に分けることができ、各プロセスでのスタッフ間の会話を分析した。その結果、どのプロセスでも、スタッフらはケアの中で獲得した知識、情報、スキルなどを報告し合い、活発な議論を日々行っていた。ここから、質の高いチーム・ケアの実現には、個々のスタッフのケアに有用な知識、情報、スキルを常に共有化するシステムが必要であることがわかった。

第7章では、一般高齢者や認知症高齢者へのQOLの向上やBPSDの緩和を実現するために必要なアクティビティ・ケアにおける将来的な展望を述べた。一般高齢者には、個別支援が必要な高齢者の割り出

しと、個別支援の必要性が低い高齢者に対しては、興味・関心を引くような活動を提案する。認知症高齢者には、BPSDを増強させない、こころを落ち着かせて活動に集中できるメンタルとアクティビティのケアに必要なスキルを備えた支援ロボットなどを推奨し、認知症高齢者および介護スタッフへの支援が同時に行えるようなシステムを提案した。

以上、本論文は、メンタルとアクティビティのケアに必要なアセスメント・スキルやコミュニケーション・スキルを習得するための教育支援アプリケーションを開発して、評価実験により有用性を明らかにした。また、個々のスタッフのスキルに基づき、ケアの中で獲得する知識、情報、スキルなどをスタッフ間で共有し、活発な振り返りミーティングを実施していくことで、個人化したアクティビティを提供できるようになることがわかった。個人化したアクティビティにより、一般高齢者や認知症高齢者へのQOLの向上やBPSDの緩和を実現できるという有用な知見が示された。

平成30年1月29日に実施した博士論文公聴会においても種々の質問がなされ、いずれも著者の説明により質問者の理解が得られた。

また、本研究は、審査付学術論文12編、審査付国際会議論文2編、学会発表19件等で報告されており、本研究は博士の学位に値すると言える。

以上の審査結果に基づき、本論文は博士（学術）の学位を授与するに値すると判断され、審査員全員一致で合格と判定した。